死生観についての考察(報告書要旨) 2021/10/20坂口純則

1. 死生観への関心

退職後のライフワークとして仏教(禅宗)を学ぶと決めていた。

手始めに座禅会から始めようと思い、鎌倉円覚寺の座禅会に参加している。

現在、リモート(週3回)、道場(月1回)を継続している。

仏教への関心は死生感を避けて通れない。

宗教情報センターの調査によると、仏教主要7宗派のうち、死後の世界については、曹洞宗、 (禅宗)を除く6宗派が極楽浄土を肯定しており、「極楽浄土」が主流のようである。

Ⅱ. 科学的、哲学的、宗教的考察

1. 死んだらゴミになる

立花隆氏は、著書「死は怖くない」の中で、死について考え方は2つある、と言っています。 1つの代表的考え方が「人は死ねばゴミになる」。唯物論的な即物的考え方である。 もう一つは、人は死んでも死なない。死後の世界があり、死んだ人もこの世界を見守って いるという考え方。

私は唯物論的な考え方もわかるが、二つ目の日本人の持つ風習的感覚も、分かるような気が します。

2. 哲学に解はない

死のテーマに向き合おうとしたのは、近年の実存主義哲学者たち。 しかし、キルケーゴールは、死は絶望であり、それからの救済は信仰にしかないと 結論づけている。哲学の行く末は、絶望か、信仰かということになる。

3. 気になる天国と極楽

死生観を考える時、死後の世界として、キリスト教にある「神の国(天国)」と、仏教思想 にある「極楽浄土」には惹きつけられる魅力があり、その思想を調べてみた。

天国(神の国)は一神教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)の世界観にあり、極楽浄土 は仏教のうち、特に念仏宗が大衆に強い影響を与えていたことが分かった。

ただ、天国も極楽浄土も強い信仰心のある人たちの世界であり、私のような一般な無宗教者 には無縁の話ということになる。

Ⅲ、私の死生観とこれからの学び

1. 私の死生感

信仰を持っていない私は、「神の国(天国)」にも、「極楽浄土」にも行けません。 私は、地球にいる全ての生物が、生まれたら死を遂げていくのだから、他の生物同様、人間も 死んだら、肉体、意識とも消滅していくのだと思っています。

ただ、亡くなった人は、遠い空から家族を見守るという観念は捨てがたい。

これは日本古来の宗教や、現在の法要及び盆・彼岸などの風習の影響なのかもしれません。

2, これからの学び

私は、死はまだ先のことで、さし迫った問題とは考えていませんでした。

今回、死生観を考える機会を得て、少し意識が変わりました。

死は必ず、生きる途中にやってくる。これに立ち向かうには、いつ終ってもいいように生きる、 これしかないと。禅を学ぶことで、生きる時間(とき)を大切にし、死への覚悟を整えて いくことが、これからの学びと考えています。 以上